アメリカデフバスケ視察　報告

三瀬　稜史（みつせ　たかし）

デフバスケットボール男子日本代表/JDBA普及委員

●報告内容

・アリゾナ州キャンプ
・コネチカット州キャンプ

・アリゾナ州キャンプ

学生参加人数、80人

（小学生14人、中学生20人、高校生36人）

ほぼアメリカWEST(西)に住んでいる参加者（主に学生が参加多）

お互いのバスケスキルレベルアップを試み、

参加者の交流面が多いキャンプ

・アリゾナ州キャンプ

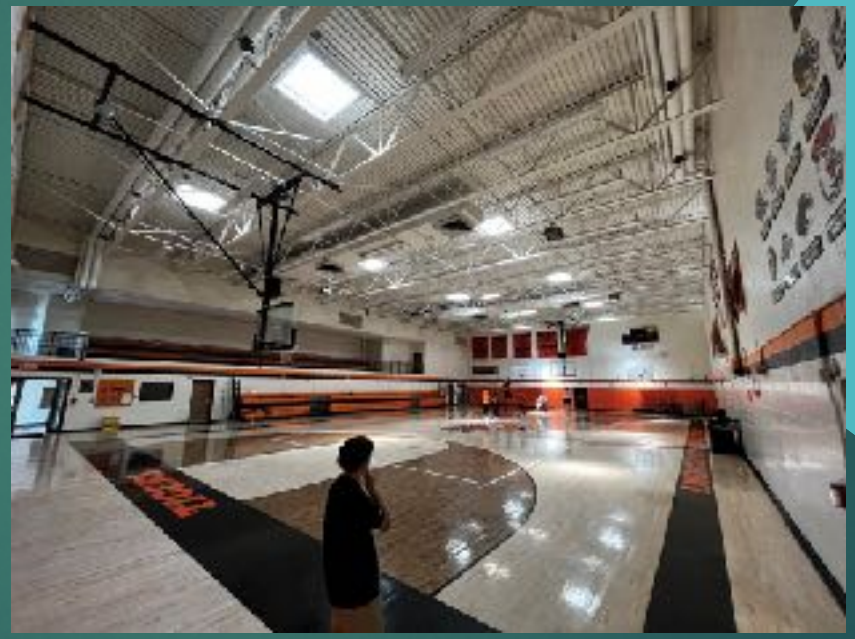
・アリゾナ州キャンプ

■練習試合の量が多め。午前は基礎練習、
午後からゲーム実践(5対5、3対3)。

■参加者、特に学生たちの交流目的があり、
練習試合の経験を積み、本格的な「選手」
として成長する機会の育成的な合宿。

・コネチカット州キャンプ

学生参加人数、57人(中学生と高校生も含めて)



ギャローデット大学を拠点に開催、将来的にギャローデット大学に入学、興味ある学生たちを育成の目的にした合宿

・コネチカット州キャンプ

・コネチカット州キャンプ

■参加する学生はほぼギャローデット大学に
興味ある学生の参加多。

■基礎練習のメニューは幹事（キャンプスタッフ）が決め、ギャローデット大学のバスケ学生スタッフたちが基礎練習、指導する。専門スキル（ハンドリング)は専門スキルコーチに派遣してもらい、バスケスキルアップの4日間キャンプ。

・２つキャンプを通して感じたこと

▪２つの合宿のも目的が異なる

・アリゾナ州合宿ではバスケットボールを楽しめて、学生たちとの交流でお互いに磨いていく環境でした。

・コネチカット州（ギャローデット大学）合宿ではアメリカ合衆国で1つだけのろう大学であるギャローデット大学という歴史があり、ブランド性が高く、ギャローデット大学のバスケットボール部を強くするために、今回の合宿に参加する高校生が多く、将来的にギャローデット大ブランドや将来性が有望な学生を、さらに力をつけていく、育成の環境だと感じました。

▪２つ合宿の共通点とは？

・いろんな経験してきたDeaf選手とコーチから、若い世代たちに受け継ぐところが強みがあり、Deaf(デフ)の誇りを持てる選手を育てている（育成面が強い環境）。

★Deaf(デフ)バスケットボールとは？

アメリカのDeafは「聴覚障害（ろう者、難聴、中途難聴など）病理面にこだわらない」「社会文化、社会生活面の重視」

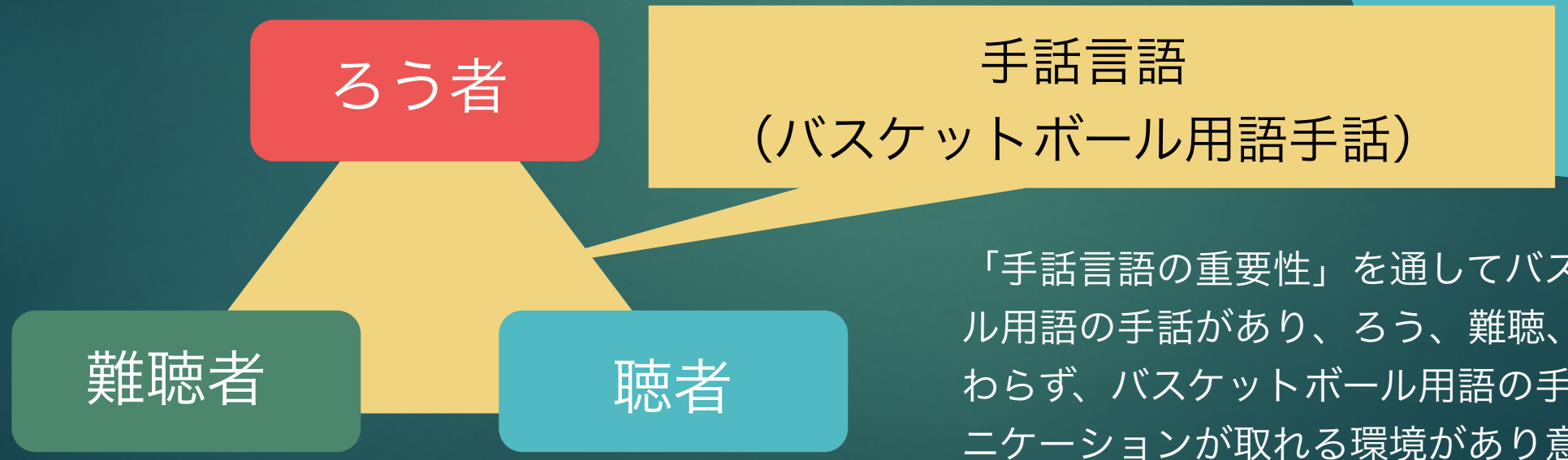
★アメリカ遠征行く前..疑問点↓

・アメリカデフバスケの場合、ろう者、難聴に関わらず、手話でコミュニケーションを取れている。そういった環境はどうやって作り上げることが出来たのか....？

・経験してきた人(選手、コーチ)から若い世代へどうやって受け継ぐことができたのか...？

・アメリカデフバスケの場合、ろう者、難聴に関わらず、
手話でコミュニケーションを取れている。そういった環境は
どうやって作り上げることが出来たのか....？

日本とアメリカとのデフバスケの違いとは「手話言語の重要性」



「手話言語の重要性」を通してバスケットボール用語の手話があり、ろう、難聴、コーダに関わらず、バスケットボール用語の手話もコミュニケーションが取れる環境があり意識して作り上げている。

・経験してきた人(選手、コーチ)から若い世代へどうやって
受け継ぐことができたのか…？

■バスケットボール用語手話が出来ており、キャンプを通してコーチから選手に受け継ぐことができる。聴こえない子供たちとの交流することができ、自然に手話言語の重要性を自覚することが出来る。

■日本のデフバスケットボールでは、バスケットボール用語がほとんど指文字するのが多い。そのため攻守の切り替えが速いスポーツなのに、コーチと選手とのコミュニケーションする時間がかかってしまう場面が多い。

■アメリカではコーチと選手とのコミュニケーション時間を短縮のためにバスケットボール用語の手話が出来ており、スムーズにコミュニケーションができ、プレーに幅が出ている。

・今後の私たちの動きに期待すること

■定期的、全国から学生向けのキャンプを実施する。
本格的なキャンプを行い、基礎練とか実践ゲームの経験で
レベルアップする。

コーチ側もコーチとして経験を積むことが出来る。

■日本オリジナルのバスケットボール用語手話を作る。
アメリカのバスケットボール用語手話から参考より